

大学は生きかえるか

— 学生にとっての授業・教師にとっての教育 —

日時：1994年10月27日（木） 16:30～17:40

場所：新学生会館会議室 9

講師：東京大学教育学部助教授 荻谷剛彦 氏

牧：

1994年度の総研講演会を開催させていただきます。

本日司会を担当いたします総合教育研究室の室長をしております牧でございます。どうぞ宜しくお願いいたします。

本日は、演題として「大学は生きかえるか— 学生にとっての授業・教師にとっての教育—」という演題で講演会を開催させていただきます。お迎えいたしました荻谷剛彦先生をこれからご紹介させていただきます。先生は、東京にお生まれになりまして、ノースウエスタン大学大学院を卒業され、社会学のPh.D. (哲学博士号)をこの大学でおとりになっていらっしゃいます。職歴といたしまして大学共同利用機関、放送教育開発センターを経まして、現在は東京大学の教育学部の助教授でいらっしゃいます。ご専攻は教育社会学、並びに比較社会学でございますが、これに関する著書も多数ございますが、最近の図書を御紹介いたしますと「学校・職業・選抜の社会学」これは東京大学の出版会から出たものでございますが、この他に「アメリカの大学、日本の大学」、これは玉川大学の出版部から出ております。

本日の講演会に関しまして、総研がこういった催しをもちました目的、ならびに内容について簡単にご紹介いたして、さっそく講演に入らせていただきます。

近年大学教育をめぐる諸問題は山積しており

まして、やはり、大学そのものの在り方については真剣な討議が必要だろうと思われまふ。総合教育研究室ではもっとも身近な授業評価などを通して、大学の諸問題、特に学生との関係で、顕著な授業等の検討を致しております。これらは、当然21世紀に向けて大学における、これは私の私見でございますが、一つの改革になるのではなるのではないかと感じておりますが、そういったところに歩みつつあります。

総合教育研究室も全学的な施設と致しましてこのような問題について全学的に講演会を開催し皆様方の関心をそちらにむけたい。こういう形で開催を致す事に致しました。以上が総研が企画致しました本日の講演会の主たる内容でございます。

それではさっそく荻谷先生に先ほど申し上げました演題で講演を賜ります。

荻谷：

ご紹介にあずかりました東京大学の荻谷です。よろしくお願ひいたします。

さきほど牧先生からご紹介いただいた私の本の一冊の中に「アメリカの大学・日本の大学」というのがございます。どうもそういうものを書いてしまったせいなんだと思いますが、それ以来、そんなにたくさんではありませんがこういう趣旨の話をする機会を頂くことがだんだん増えて参りました。実はこういうお話をする時にいつも大変居心地の悪い思いを私はいたしま

す。それにはいくつか理由があります。

一つの理由は、正直に申しまして私はまだ3年半しか大学の教師をやっていません。3年半しかやってない人間が、もう何年もやってらっしゃる10年、20年、……40年の方はいらっしゃらないと思いますが、長年大学の教壇で教育に携わってらっしゃる先生方の前でなにか偉そうなことが言えるのかと言えばとても自信はないのです。そういう意味でこれから話すことは何も知らない、いわば人類学者が未開部落で観察をするように、何も大学について知らない人間が、大学というものを3年半見てその中で自分なりのことをやってきた、一種のフィールドワークの結果ぐらいだぐらいに思っただけです。そういう意味でこれから話すことは何も知らない、いわば人類学者が未開部落で観察をするように、何も大学について知らない人間が、大学というものを3年半見てその中で自分なりのことをやってきた、一種のフィールドワークの結果ぐらいだぐらいに思っただけです。

それからもう一つこういうお話をするときの居心地の悪さを生む理由の一つは、私の肩書きにあります。私は東大の教育学部というところにいます。ですから、教育学部にいれば教育の専門家だという風に見られてしまうんですね。そうするときと大学教育の専門家が喋っているに違いないとなって参りまして、先ほどご紹介にもありましたように私はもちろん教育を対象にした社会学的な研究というのは私の専門の一つなんです、むしろ労働市場とかそういうような事の研究を実際にはしているわけですし、決して大学教育をどう改善するかとか、カリキュラムをどうするかっていうことは、専門的に研究しているわけではないんですね。ただ先ほど言いましたような1冊の本を書いたことを契機に、大学について話をしたり書くような機会が増えてきて、しかも所属が教育学部だという事になりますと、苧谷というのは、大学教育の専門家だとか思われたりするようになった。そうするとこれは大変居心地が悪い。

はたして、教育を改善するのに専門的に研究ができるのかどうかということ自体非常に難しい問題なわけですね。ちょっと振り返っていたら、全国では一万人以上の

教育の研究者が居る筈なんです、それだけの人が長年にわたって教育のことを研究してきた結果、日本の小・中・高校教育が良くなっているかという、必ずしもそうとも言えない。そういうことを考えますと、私のような非力な者が教育学部において教育の研究をしていたとしてもですね、なかなかそこから実践的な、大学教育をどう変えるかということについての具体的提案がすぐ出てくるようなものでもない。そもそも教育について改善に資するような実践的な研究ができるかどうかということすら、非常に難しいところがあるわけですから、そういう点から言っても教育学部に所属しながらこういうお話をするのは大変片腹痛くなるわけです。

それと、第三に、これが実は非常に居心地の悪くなる場所なんです、大学の授業についてお話をする場合、特に講演という形で話をするというのは非常に辛いんですね。というのは、この講演を聞いていて皆さんが眠くなってしまったら、私のやってる授業なんて面白くない、というような見方をされてしまいます。そう考えると講演という形で、今日もこれからOHPとかを使いますが、OHPの基本的な使い方も知らない人間がこういう話をするというのは果たしてそれで教育技術はちゃんとなっているのかという風になってしまうんですね。

そういう三つ位の点から考えましても、実はこのテーマというのは私にとって大変苦痛なテーマである。しかし、やはり苦痛ではあるけれども何か喋らなければいけない。そういうような、自分の中でも沸々とした気持ちを持ちながらも、矢張り何か語っておきたいものがあるところに、今の私を含めて大学の置かれた状況というものがあるのではないかと思います。

いよいよ本題に入っていきますが、この数年新聞等を含めまして、盛んに大学の教育改革、大学改革一般というよりはむしろ大学における教育改革について報じられるようになってきました。この関西学院大学の総合教育研究室の仕事なども新聞等でよくご紹介される機会もありますし、今、大学の教育が変わりつつあるんだと

ということが社会的な注目を浴びているわけですが、一体何故今大学教育の改革なのか、ということなんですね。それを私なりに、ちょっと社会学的なイマジネーションを使って考えてみますと、大きく分けると外生的な要因と内生的な要因の二つに分けられるんじゃないかと。その辺の改革の背景みたいな話から入っていきたいと思います。

まず、外生的な要因という風に考えますと、すぐに思いつくのが、よく世間で言われる十八歳人口の減少ということです。二年前がピークでどんどん十八歳人口が減ってくる。この一、二年は減りつつあるんだけど何とかそんなに大きな変化は出てないんじゃないかという説もありますが、人口減少の幅を見ますと、それ以後来年、再来年と減る幅がずっと大きくなるんですね。そういう風な減り方をしていくとこれはますます進学者の数がどうなるかというような問題が深刻になってくる。その結果、当然ながらマーケットメカニズムが働いてくるだろうと考えられます。

そうした時に、これまでですと、建物を綺麗にするとか、パンフレットを綺麗にするとかといったことをやって来たわけですが、大学が生き残れるかどうかという所では、いよいよ最後はやはり商品の中身といましようか、教育でアピールしなければならなくなる。そういうところから、減少期を睨んだ上で大学教育の改革を進めなければいけないという、おそらくそういうような意識が各大学の中で強まっているのだと思います。

それからもう一つ、これはそうした教育改革を実際に許すようになった外在的な条件だと思うんですが、文部省のいわゆる大学設置基準の大綱化といわれる事態です。要するにこれまでカリキュラムを縛っていたものを大綱化という形でレッセフェール (laissez faire: 自主性に任せる) にして自由競争を持ち込むというような政策だと思うんですが、その中で各大学に工夫の余地というものが出てきた。実際に大学が何をするのかということがそのままマーケット



の結果に跳ね返ってくるという、そういう仕組みをつくり出そうというところにおそらく文部省の政策的な意図があるのだと思います。

そういう外生的な要因があるわけですが、今日お話ししたいのはこういう点ではありません。そういったところは高等教育の専門の研究者の方にお任せしておいて、むしろ今日の話の中心は、内生的な要因から大学の教育について考えていく、ということなのです。

それでは一体、大学の教育改革を押し進めている内生的な要因というのは何なのかということを考えたいわけですが、その最大の問題は大学における知、知識をとりまく状況が激変しているということにあると私は考えます。

今地球的な規模でいろいろな問題が起こっている。その中で知の生産というものが本当に効率的に行われているのか。さまざまな問題に対して回答を与える知が生産されているのか。そう考えますと、非常に混迷を極めているという状況にあるわけです。もっと言いますと、そうした知の生産において大学の果たす役割が非常に怪しくなっている。これは京都大学の竹内洋先生の言葉ですが「大学型知識の終焉」——大学が生み出している知識というものがかすかす意味を持ち得なくなっているのではないかと、ということも言われているわけです。それを私なりに解釈しますと、要するに正解のない時代、あるいはモデルのない時代の中で、如何にして知識を生み出していくのかということに日本の大学が直面しているという事なのだと思います。

よく文化人類学などで、カーゴ文明というよ
うな事が言われます。要するに未開民族の所に
大きな船がやって来てそこで新しい文明が持ち
運ばれると。おそらく、日本の大学の百年の歴史
というの、悪く言えばこういったカーゴ型の
知識を待望していたんじゃないかと思えます。
つまり日本の外に、外国の立派な研究があって、
その知識を導入して、それを紹介していればそれ
で大学教育が成り立ってきた。もっと言えば、
確かに外国産の知識をきちんと咀嚼して理解し
ていけば、それ自体が我々の社会の問題を考
える上でも十分な回答を与えることが出来るとい
うくらいの、いわばカーゴ型知識を待望してい
た時代があったんだと思えます。ところがある
意味では冷戦構造の崩解にも関係しているわけ
ですが、特に社会科学や人文科学の知識に関し
ては、何か大きな回答というんでしょうか、社
会を変える上で何らかの正解というものがど
こかにあってそれを目指して行けばそれによっ
ていろいろな問題が解決出来るんだ。そういう期
待や認識があったところで大学の知識は、いわ
ば外から与えられたものとして再生産されてき
た。

ところが、どうもそういう知識というものが、
地球的な規模の問題がいろいろ発生する中でう
まく機能なくなっている。フランスの偉い先
生のお話を聞いてくれば答えが見つかるという時
代じゃなくなっているわけですね。あるいは、
アメリカの大学者の説を引いて話をすればいい
という時代じゃなくなっている。おそらく研究
面でもそうだし、それが教育の中にも表れてい
る。そういうところに大学型知識というものが
非常に疑いを持たれる状況が生まれているん
ではないかと思えます。これを教育に引きつけて
みますと、要するに大学型知識というものが、
既に学生にとってはなんら権威を持ち得なくな
っているんだと思えます。もちろんその根っこ
はもう二十年以上も前の学生運動とか学園紛争
といわれた時代にあった大学人の権威はとうに
失墜しているわけですが、その後も大学型の知
識というものは辛うじて生き延びてきた。とこ

ろがその大学型の知識すら権威を持ち得なくな
っている。そういうことが教室という場面で
様々な現象を生み出しているのではないかとい
うことです。たとえば武庫川女子大学の新堀通
也先生たちが研究している、私語の問題など
です。これは先生方、普段教壇に立っていらして
私語があるということはどここの大学でも聞く話
ですが、私語をどうするかということが大学の中
でも真面目に論じられるようになってい
る。学生にとって知識が権威を持ち得た時代には自
分が解らないことにも何となく有り難がって聞
いてくれた。だけど自分の解らないことに有り
難みが無くなった学生がお喋りを始めるのは
当然なわけですね。そういった意味で大学型の
知識というものが権威を持ち得なくなったこと
の影響が教室の場面で私語の問題を生み出して
いるのではないかと考えられます。

それから別の漢字を使った「死語」の問題も
ある。東京工業大学の矢野眞和先生は、むしろ
教師の言葉そのものがもはや死語になっている、
という風なもっと厳しい言い方をされておられ
ます。それは先程言いましたように、おそらく
大学型知識の持っている意味合いが変化する中
で、時代の変化に対応できない大学人が言葉を
教室の中で紡ぎ出していても、それが何等意
味を持たなくなったことを皮肉った言葉だと思
います。勿論そこまで事態が全く悪くなってい
るということをお願いしたいわけではないんです
が、ただ大学が生み出してきた、あるいは伝達し
てきた知識というものが権威を持ち得なくな
った状況が教室の中でこういう問題を生んでい
ることは言えるかと思えます。

それとこれも先程引いた竹内洋さんの言葉で
すが、そもそもそういった大学型知識に権威を
感じるの学生側でも“知的なオタク”と言
われて、非常に他の学生から疎んじられる、嫌
われてしまうような存在になっている。今時洋
書なんか小脇に抱えていると、こいつはちょっ
と変な奴だと思われてしまうわけですね。まし
てそれを商売にするまで長年やってきた大学人
なんていうのは、もっとも変な“オタク”のど

ん詰まりみたいな存在だという風に見られてしまうわけです。だから大学人の言葉を有り難がってなんか聞いてくれない。そういう点からみても、これまでの伝達型あるいは伝授型の知識では大学教育は成り立たなくなっている。そういう状況が大学の教育を変えなければいけないという必要性を作り出しているんじゃないかという風に私は考えます。

ではどうのように考えたらいいか。この点で今日の話の一つの中心にしたいのが、伝授型の知識から如何に参加型の知識に組み替えるかという事です。そういうことから話を具体的な大学改革の方に移って行きたいと思うんですが、今年発表された文部省の調査によりますと、今大学教育の改革の流れの中に幾つかのポイントがあるとされています。一つの大きな流れはいわゆるカリキュラム改革と言われるものです。これは文部省の調査によりますと大体8割くらいの大学が取り組んでいたり、実際に既に実行に移しているようです。もう一つのポイントが、こちらの関西学院が非常に先駆的に取り組んでいる学生による授業評価です。要するに学生の側から授業というものを捉え返して、それを情報として使って変えていこうということです。ただ文部省の調査によれば、これを実践している大学はまだ一割にも満たないというような結果が出ているようです。それから三番目が“シラバス(syllabus)”といわれるものです。

“シラバス”っていうのは何なのかということについてこれからお話をしますが、大体2割弱ぐらいの大学でシラバスを創っていると言われている。ただどうも最近いろいろな大学でお話を伺ってみますと、日本の大学で創り出したシラバスというのはどうも私の知っているシラバスとは違うんですね。どこが違うかというところ、どうもいろいろな大学でお話を伺いますと、シラバスの話題になったときに皆さん厚さを自慢なさる。「うちで今度シラバスを創りました。」「見せて下さい。」「これです!!」っていうわけですね。私の町の電話帳ぐらいの厚さのものを見せられたりする。別の大学でそういう話にな

った時に、「うちのはちょっとまだうまく出来てないものだから」などと恥ずかしげに出すのがその半分ぐらいの厚さだったりするわけです。文部省の大学の設置等を認可する事務局の窓口には物差しがあってそこでシラバスの厚みを測っている、という噂があるくらい、いわばシラバスの厚みが大学改革への取り組みの尺度であるといった捉えられ方もされているようでして、こぞって厚いシラバスを創ることがどうも流行っているようです。

では、その厚いシラバスは何を意味しているのかと考えますと、これは到底持ち歩かないことを前提にしているわけです。誰も学生はそんな重くてさかばるものを持ち歩いて授業から授業へなんか絶対に移動しない。そうすると何のためにシラバスがあるのか。要するに授業を選択する前に見ておけばいいという形でシラバスが作られている。どうもこれは私の知っているアメリカの大学のシラバスとは随分違うんですね。これからちょっとお見せしますが、アメリカの大学のシラバスというのは本当に1枚2枚ぐらいのものを先生方が各自自分のフォーマットで作ってそれを授業で配る。そういう形態をとるようです。

これは私がアメリカで体験した授業を元にそれを日本語に直してみたシラバスの例です。こういう大体1~2ページぐらいのものを作って配るわけです。講義名があって、どこで授業をやるか、何時にやるか、といった情報が記載されている。それから大概オフィスアワー、これは“この授業について質問があればこの時間に来なさいよ。この時間ならアポ無しで先生は質問に答えますよ。”という時間についての情報があって、そして講義のねらい、この授業前に他の授業としてこういうものをとってなければ駄目ですよ、といったリクアイメントがあったりして、それから各回の授業についての説明がある。その中で、私が知っているアメリカの大学のシラバスの特徴は大体が毎回の授業で何をやるかについて疑問文の形なりあるいはテーマは何かという提示がなされている場合が多

いんですね。そしてまたそのテーマを考える上でどういう文献を使うのかという事についての情報が必ず入っている。これを見た学生の側はどのようにこのシラバスを受け止めるかという、ああこの回はこういうテーマで、例えばちょっと見にくいかも知れませんが、学校はメリトクラティック(meritocratic)かどうか、学校というのは能力主義的かどうかということについて、こういう二つの文献を通じて議論するんだなというつもりでこれらの文献を読んで来るようになってきているわけです。

つまりどういうことかという、問いを發してその問いについて考えるための材料についての情報が与えられている。すると学生はまずそれを自分で読んで来て、そしてこの問いに答えるような参加の仕方を授業で行なう。そういうことがこのシラバスが發しているメッセージなのです。それからちょっとそれと話は離れますが、例えば成績評価はどうするかとかというような情報もありますし、どこで文献を得るかという情報もあります。こういうことは日本のシラバスでも最近は出てきているようです。実物もお見せします。これはですね、僕が居たノースウェスタン大学の社会学の大学院のクリストファー・ジェンクスという教育社会学では非常に有名な先生、それから数理社会学で有名なクリス・ウィンシップという先生の授業ですが、“Please post”と書いてあります。これは「これを掲示して下さい」ということで各パートメントに授業が始まる前にこういうものを掲示しておいてもらうんですね。で、これを見て関心のある学生は先生の所に行ってこのシラバスを下さいということになるわけなんです。ですから決してぶ厚いものとしてバサッと集めなくてもこういう風にポストしておけば十分授業についての情報が伝わる。このシラバスも沢山の文献があってそれを必ず読んで来てそれで授業をやるというような形態になっています。

要するに今お見せしたようなシラバスの特徴というのは、たとえ講義形式の授業であっても必ず学生の予習を前提にすることです。

そしてその予習をする際に、テーマ/トピックが何であるかということシラバスが各回の授業について知らせているという事です。ですから学生にとっては予め指定された文献を読んでから授業に参加するのであって、授業ではその文献についてただ単に解説したりするだけじゃない。それに対する反論だとか異論だとか問題点について教師がその意見を開陳し、場合によっては学生とのディスカッションをする。講義形式の授業ではあっても必ずその授業の中に一種のダイアログといいますか、一方向的なコミュニケーションではない双方向的なコミュニケーションを含んでいるところにアメリカの大学の特徴があり、それを反映したシラバスの作り方があると言えるわけです。この双方向型かモノログ型かということがおそらく日米の大きな違いだと思います。今までの日本の大学を考えますと、これは先程言いました伝達型の知識というのはまさにこのモノログ型、下手すると本当にモノログでして先生がブツブツ言っただけで誰も何も聞いてないというほどのモノログになってしまう場合もあるわけですが、そういったものから如何にしてダイアログ型、しかもアメリカ的なダイアログには到底日本人のコミュニケーションはなりませんから、日本型のダイアログにどうやったら出来るのかと、そういうことについて考えていく必要があると思います。

その際に、私が今回お示ししましたようなアメリカと日本の大学のシラバスという点で考えますと、やはり大事なものは大学の授業というものが正解を与えるのではなくて、如何に問いをたてるのか、その問いのたて方や、たてた問いについて学生にどのように考えさせるのかという事が大事になってくる。つまり考えさせることを参加の糸口としてどうやって授業を展開できるか、その辺に日本型のダイアログ式授業を展開する可能性があるんじゃないかと私は考えます。その方法としてどういうものがあるかという、文献を挙げるとか、資料を配るとかあるいはクイズだとか、そういうような取り組

み方があるだろうと思います。

こういうことを考える時に、それじゃ現在の学生たちにとって面白い授業とは何なのかということが次に問題になってくると思います。今回の講演の副題に私は敢えて“授業”という言葉を使いました。学生にとっての授業という言葉を使いました。これはゼミや講義をひっくるめて授業と言っているんだという意味もありますが、どちらかと言えば授業といういい方は学校教育の用語なんです。今まで大学の教育の世界では授業なんて余り言わなかった。ところが段々最近どうも授業という言葉が定着しているように思います。それは何故なのかと考えますと、やはり講義という知識の伝え方のその意味合いが変わって来てるんじゃないかと思えます。高等教育の研究で有名な喜多村和之先生によれば、講義というのは教授者が、つまり大学教授が自分の持っている学問を開陳する場であると言われていた。つまり講義というものは如何に自分の学識なり、学問をして自分が培ってきた知識なりをどう伝えるのかという点、学問の開陳であるところにコミュニケーションスタイルとしての特徴がある。ところがそれが授業というように言われ出した。どうも学問の開陳だけではうまく行かなくなってきた。そこでそれを如何に参加型の知識伝達に変えて行くのかという事になるわけです。そうなりますと学生の側から見た場合には、学生が授業に如何に関わるのか、学生の授業の関わり方を問題にしていくことになるわけです。もちろん理想的には学生が教授者が提供する知識そのもの、その知識の中身自体に関心を持ってきて、それで熱心に聞いてくれるというのがもちろん理想的な形なわけですが、果たしてその時に伝えられている知識自体にどれだけの意味合いを学生が見い出せるのか。あるいは本当に研究者としての教師がそうした知識の意味を見い出せるかどうか。ここには先程言いました大学型知識の混迷という問題もからんでくるわけです。そういう背景を考えますと、なかなか難しい時代になっている。学問と時代とがずれてきている。そ

うなると教授者の側が既に正解を持っていないわけですから、その中で学生にとって面白い授業を展開するためにはどうしたらいいかを考えなければならない。おそらく大学型知識が権威を持ち得た時代というのは、講義の内容が解らなくても、解らないのは学生の所為だと言って良かったと思うんですね。つまり難しい内容であればあるほどその知識は有難みを持った訳だし、それを解らないのは学生の理解が足りないからだと言って良かった。ところが難しそうなのに意味があるのかどうか解らなくなっている時代に本当に解らないことを教え続けることに意味があるのかどうか。これは学生にとって苦痛以外の何物でもないわけです。そしてその解らなさを、学生の理解が足りないからだという風には言えなくなっている。つまり、授業が解るか解らないかという事が誰の責任なのかという事が問われるようになってきているということです。そういうように考えますと、学生にとって面白い授業というのは提供されている知識が学生たち自身とどのように関わりがあるのかをうまく提示できるかどうかによって結構決まって来るんじゃないかと思えます。

そういうところから授業の取り組み方の工夫としては、導入部分の中だけでもいいですから如何にして学生の参加を促すことが出来るのか、参加の促進ということで色々できると思います。言い換えますと、先程言った大きな時代の流れの中で今我々は答えを探しているというよりも、むしろ何を問うべきかという問題探し自体をしているわけですね。そういうことから考えると、如何にして学生が問題の当事者になれるのか、当事者としての意識を持つことで与えられる知識との距離を縮めることが出来るんじゃないかと考えられるわけです。そういう意味での学生の参加を促すために工夫の余地というものがあるだろうということです。

別紙としてお配りした物をご覧いただきたいんですが、“クイズカルト15”というものです。これは実際に私が教育社会学という授業で使っている一つの小道具です。これを配って学生に

「ちょっと時間をあげるからこたえてごらん」と言って答えさせます。この授業は何の授業かと言いますと、学校で教えられる教育的な知識というもの和我々が通常社会で持っている一般的な知識というものがどう違うのか、そしてそれを教育的な知識として区切るということがその社会にとってどういう意味があるのかということについて教えるための授業なんです。その内容は省略しますが、例えばこういうクイズをやらせます。学生は、これは関西圏では受けないかも知れないし、最早ジュリアナ東京は無くなってしまったんですが、こういうことになると非常に敏感に答えるわけですね。それと同時に尾崎豊が、尾崎豊をご存じですか？今日の聴衆はちょっと知らないかも知れませんが、1992年に死んでるんですね。鎌倉幕府は1292年に滅亡している。この二つの年号を知っているという事がどういう知識の違いなのかということ。これを授業でやるわけなんですけれども、知識が混在しているという状態を実際に体験させるわけですね。その中で自分は何については知っている、あるいはどういう知識を持っているということが自分にとってどういう意味があるか。例えば、筍のあくを抜く方法は学校では習わないわけです。これは米糠でゆでるとか、米のとぎ汁でゆでると良い、実はうちの家に聞いた知識で私も知らなかったわけですが、こういうことを知らないということと、例えば方程式を解ける、酸素の原子番号が何かを知ってることがどう違うのかなんていうことをまず体験者としてそこに関わらせちゃうわけですね。例えばそういうことをやってその後で知識のある学校を選び出してきて教育的知識として権威をつけて教えたりテストしたりということが社会にとってどういう意味を持つのかみたいな授業を展開していく。そのいわば導入部にこういう経験をさせるわけです。

こういう導入なしに教育的知識とは何かとか、一般的知識との違いは何かとかをのっけから話をして、おそらく学生は、うーんそうなのかなあというぐらいに思って聞いているのかも知

りません。ところがこういう経験を通じて、つまり参加を経た上で同じ話をすると、ああそういうことなのかと、もっと身近に理解できるわけですね。そういう意味で、知識との距離を縮める、そういう参加を促すための工夫をすることで与える知識の持つ意味が変わってくる。

他に僕がよくやるのは、食べ物を持ち込んで学生に配ったりするんですね。例えばブリッツかなんか持って来て学生を二三人立たせてそれ分けなさいと言って分けさせる。二人の学生に三本あげて分けさせる。すると大概一本ずつ配って残りの半分を二つに割るんですね。なんでまっぶたつに割ったのかとか聞いてこれで平等主義と報酬の配分なんて社会学の授業をやったりするわけです。それで最後にみんなにブリッツ一本ずつ食べさせたりすると、学生は「分ける時に人々が納得するってこういうことか」とわかる。後で聞くとブリッツを食べたことしか覚えてない場合もあるんですけども。ま、ともかくそういう形で導入に使うと、いわば自分達が実際に物を分けるってということが社会学の中でどういう問題なのかということにアプローチ出来る。

実は、元々社会科学にしても人文科学にしても、自然科学の場合は勿論もっと違うようなものがあるわけですが、人文系の学問の中にはそうやって自分達の生活との接点が必ずあった筈なんです。ところがどうも、さっき言った大学型知識というのはそこからどんどん離れていく中で権威を創り出してきた。ところがその権威自体が時代の変化の中で疑われはじめています。そうだとしたら、もう一回もとに戻してあげればいいじゃないか、ということで、こういう参加型の工夫が授業でも出来るんじゃないか、ということです。実はこういうことは、授業にとっただけではなくて、研究にとっても重要な意味を持っているという事は最後にお話しします。

次にレジュメの2ページ目に行きまして、今のは要するに学生が面白い授業というものをどういう風に捉えるかというお話であったわけですが、じゃ今度は教師にとって楽しい授業とは

何かという事を考えてみたいと思います。楽しいという言葉をおざと使ったのはですね、これも例えば教育学的に議論し出すと、大学の講義というもの、あるいは大学に於ける教育というものは〇〇である、なんていう風に色々難しいことが言えるわけですね。確かに大学の教育の持っている崇高な理念について議論することもできると思うし、そういうことの価値が無いなどとは申し上げません。けれども、そういう肩肘張った議論をするんじゃないかって、教師もやっていてやりがいのある楽しい授業というようなスタンスから授業を見つめてみると随分違うんじゃないか。どうも授業が楽しいかどうかを議論する時のレベルと大学教育の目的とか理念とかって議論する時のレベルとは随分違って、実は楽しい授業のレベルで議論した方が現実の中では有効性を持つんだけど、どうも理屈っぽい話をし出したとたんに、大学改革の議論もそうですけれども、大概現実から宙に浮いて、むしろ改革の足を引っ張るっていうんでしょうか、前に進まないような形で議論を展開する場合がありますよね。だからあまりもっともらしい議論をするよりも、むしろ楽しいぐらいに捉えた上で授業とは何なのか、というように見た方がいいんじゃないか。

そういうことを考える時に、我々は当然ながら研究者としての側面も持っているわけですし、いくら大型型知識というものが終焉を迎えたとはいえ、それでもなおかつ知識を生産しているわけですね。論文も書けば本も書く。その本を書くとか論文を書くということと授業に於いて知識を伝えるということにどういう違いがあるのだろうか、この辺のところも考えてみたいんです。つまり本とかテキストと言われるものは印刷メディアです。これは潮木守一さんの面白い研究があるんですが、その昔、東大の法学部では先生が講義ノートを読むと学生が一字一句間違えないように写した。つまり先生の講義録のコピーが何十冊か出来るというようなことが日本の大学の授業の初期の形態であったというご研究があるんですね。そういう講義録・講義

ノートというところにいわば日本の大学の、さっき言ったような伝授型知識といますかその原型があるわけですね。それが段々と教科書というような形に発展してきて、今では教科書も随分変わってきました。

これは半分宣伝ですが、私達も『ビデオで社会学しませんか』という本を作ってビデオを見ながら社会学の授業をやるという工夫をしたりしました。これはもう最初から伝授型の知識ではなくなってるわけですね。つまり、ビデオによって、ランボーでも何でもいいんですが、僕が書いたところだと植木等が出てくるような映画なんですけど、そういうものを見せてそれを通じて学生に何か考えさせる。これも一種の導入だと思いますが、そういうような形でテキスト自体が変わってきている。メディアも変わっている。どうもそこで求められるのは矢張りそういった参加の契機をどのように創り出すかということに対する工夫だと思います。

ところで、試験などをやりますと、論述式の問題でも学生が講義でノートにとったことを、ほとんど自分なりの展開をさせずにまるで講義ノートの丸写しのような答案に出会うことがあります。これはある意味では一方的な授業の当然な反映なんですね。これはさっき言いました明治の初期の日本の大学の講義の原型と対応しているわけです。そういう一方向的な授業の持っている限界というものを逆に考えていくと参加というものを如何にして授業の中に取り込むのかという事が大事になってくるし、寧ろ参加というものを教授者の側もうまく取り入れることによって楽しい授業というものが出来るようになるんじゃないかということです。これはある意味では、研究者としては非常にジレンマになるわけですね。つまり、自分の持っている知識、これこそ伝家の宝刀のような自分の知識を伝える喜びをあきらめろということです。それを一方的に伝えるのではなくて、寧ろそういうこととは違うスタイルで如何に伝えられるかというようなことが今参加型の授業の中では求められるようになる、ということなのではないでしょ

うか。

これはさっきのシラバスの所でも言ったことの繰り返しになるかも知れませんが、要するに答えを教えるのではなくて問いや問題の立て方を教える、更には自分で立てた、学生自身が立てた問題にどうやって答えるのかという解答に至るプロセスを教えるというようなことを授業の中で如何に見せるか、しかもその中に学生を如何に参加させるかということが参加型の、日本の双方向型コミュニケーションといきましょうか、そういった授業のやり方につながっていくんじゃないかと思います。

ただこれは余り難しく考える必要はなくて、実は研究者としてはいつも僕達はどういうことをやっているわけですね。自分で問題を発見して、その問題にどう答えるかということをやって論文にしている。ただそれを授業にする時には論文で書いたことをそのまま話してしまうのではなくて、論文に至るまでのプロセスみたいなことを授業の中でどうやって見せられるかという事が参加型の授業に繋がって来ると私は考えます。

今日の話の中心は今の2点、つまり学生側から見た授業=面白い授業、教師にとって楽しい授業とは何かというこの辺でおしまいなんです、最後にこういったことを考える上で実際に、ではどういう組織的な工夫が可能なのかという事について最後に触れてみたいと思います。

これは要するに授業をどうやったら活性化できるのか、そのためのインセンティブあるいは資源というものを如何に活用するのかという組織の問題だと思います。いくら面白い授業をやろうと思っても三百人、五百人の大教室でやるのは非常に難しいです。クラスサイズには適度というものがあります。しかし、矛盾もある。ある大学で非常勤をやっている、最初の年は五十人ぐらいだったんですが、次の年に百二十人になって、三年目になったら二百人を超えてしまったんですね。そうするとどんどん先生の負担も増えるんですね。テストをやったらテストの点数を付けるのも大変になる。でも非常勤

の講師料は一銭も上がらないわけなんです。つまり良い授業をやればやるほど負担が増すという構造になってて、しかもそれに対するRewardが無いわけです。別にこれは愚痴を…、愚痴を言い出せば国立大学の先生はとめどなくなるんですけども、そういう話は今日はしません。いいたいことは適切なクラスのサイズをどう作るのかという事。それについてはやはりカリキュラム全体を編成する中で考えるべき、それこそ組織的に対応できる事柄だと思います。

それでも難しい場合に、これは勿論人員がどれぐらい要るかということになるわけですが、ティーチングアシスタントといわれる大学院生を如何に活用するかということについて考えてみたい。こういったことにはまだあまり日本で研究も行われていないようですし、実践例も報告されてないようですけれども、大きな人数の授業をティーチングアシスタントを使って小刻みに分けていく。例えば300人の授業だったら5人ぐらいT.A.を使えば、60人位の小さなグループに分けられる。60人位の小さなグループと300人の授業を組み合わせることでインタラクティブな授業のできる場面と大教室での、それは一方向的になっても仕様が無いわけですが、そういう授業とを組み合わせるといった工夫。そういう講義形式の大人数の授業とT.A.を使ったスモールセッションとの併用は、アメリカの大学などではうまくやっているわけですね。こういったことについてもある程度組織的な工夫の余地があるのではないかと。

それから次の点というのは、組織的な対応としてはやはりよくやった人が報われる、それだけ陽が当てられるという報酬の体系の問題があります。これ自体実はアメリカでもそれほどうまくいっているわけではないのですが、時間が無いので今日はお話ししませんが、レジユメの参考の所で、私が訪ねたあるアメリカの大学の授業改善センターでのインタビューの要約を書いておきました。そこでお話を伺ったことを掻い摘んで言うと、アメリカでは例えば学生によ

る授業評価を色々な面で使っていると言われますが、なかなか実際には難しい点もあるようです。アメリカの大学でも大部分は未だに研究業績が人事評価の大部分を占めるんであって、授業の改善とかそういうことについてはなかなかRewardの仕組みにはつながっていない。アメリカの大学でやっていることは、象徴的な報酬、たとえばベストティーチャー賞みたいなものを出して表彰するみたいなことはやっているわけです。それでも先生にとっては励みになると思いますし、そういうことが目に見えるようになることで一種のモデルというんでしょうか、そういう授業実践の事柄についての情報が伝わっていくという効果もあるんじゃないかと思います。

それから時間的な報酬というのもなかなか難しいわけですが、例えばアメリカの場合だとサバティカルを与える場合に研究のためだけで与えるんじゃないくて授業改善のためにも与えるみたいな工夫がいくつかの大学で始まっていると聞きました。

こういった大それた組織的な対応に至らなくても少なくともささやかな提言ではあります。次のようなことは出来るだろうと思います。それは授業について大学の先生達が集まって話をする場を作ってみるということです。インフォーマルでいいんだと思います。おそらくこういう話を二三年前にすると大変恥ずかしいことだったんですね。大学の先生が研究のことで話をするのは当然なのですが、授業について話をするというのはとても恥ずかしくてできないっていう雰囲気がありました。

先日東大の教育学部のある研究会で「今度一度授業のやり方を話し合ってみたらどうですかね」という話になりました。その時に「そういえば東大の教育学部ができて五十年近くになるけど、そんな提案が出たのは初めてだな」という話になりました。教育学部のような所ですら、なかなかこういう事について、教員集団の間で情報交換することがしにくかったわけですね。ですから、垣根をちょっととっばらってみて、

何人かのグループでやってみるなりあるいは関学のようにこういう総合教育研究室のような場があるところではワークショップをちょっと開いてみる、それにボランティアに参加していただく。そういうところでお互いの、例えば私が今日ちょっと申し上げたような、これは余り良い例じゃ無いかも知れませんが、こういうクイズというような小道具の使い方ですとか、そういうことについてお互いに話しあってみると、ああ成る程なんていうようなアイデアが随分転がってるんですね。

私達がさっきちょっと宣伝めいて言った『ビデオで社会学をしませんか』という教科書を作る時も、我々ぐらいの世代の人達が集まってわいわいやりながら作ったんですが、「社会学をどうやって教えようか」なんて話をしてたんですね。そういう時に結構みんな色々工夫している。そうやって集まらないとなかなか、ああそういうやり方があるんだという情報が伝わらないんですね。そういう場を意図的に創り出してみるだけで随分と授業の仕方が変わってくる。そういうことを通じて実は教育が変わることが研究が変わることにもつながるんだということを最後に申し上げたいと思います。

すべての分野にわたって通用するような議論では全くありませんが、ただ少なからぬ社会科学系・人文系の学問の中ではその学問の意味が問われているということは正直言って否めない事実だと思います。専門家集団の中だけで会話が成立することが価値を持った時代が余りにも長く続いてきた。専門家集団のジャーゴンというものが支配する、そういうものが大学型知識をこれまで特徴づけてきたわけです。しかしそれから抜け出さなければいけないところまで大学型知識はきてしまっている。しかも教育という面からだけではなく、研究という面から見ても、つまり社会に対して大学という機関が知識の生産の場としての責任を果たす上で何が出来るのかを考えた時に、抜け出さなければいけないのが、こういった専門家集団のジャーゴンの世界じゃないかと思います。

そういうことを考える上で授業ほど適切な場は無いし、適切な機会を与えてくれる場は無いと思います。つまり聞かなければいけない立場に立たされた学生に分からないことが、キャンパスの壁を超えてその外側にいる人達にどれだけ分かるのか、という話です。学問が専門家集団の中だけで権威を持っていれば良いんだということであれば、それで結構です。ただ、もし、そうした学問自体の意味が疑われているんだとすればそれを変えていく契機は、学生といういわば最初に出会う素人集団にとって、つまり社会の一員である学生にとってジャーゴンの世界から大学人が如何に抜け出せるのか、そのことを試す一つのリトマス試験紙としての意味を大学の授業というものが持っている。そういう風に授業というものを位置づけたときにおそらく授業の改善というものは研究の改革・研究の革新というものに繋がってくるんじゃないかと私は考えます。

勿論、例えば初級文法を教えているドイツ語の先生の場合にどうなのか、あるいは物理学の基礎を教えなければいけない先生にとってどうなのかと言われると、全てに当てはまることでは無いことは承知しています。今日のお話もごく限られた分野にだけ当てはまることなのかも知れませんが、あるいは私が関わっている社会学とか教育社会学というような分野だけの問題なのかも知れませんが、ただどうも今地球的な規模で発生している色々な問題に社会科学が十分に応えられていないというような現状を見るにつけ、矢張りそういったことに学問として応えていくための一つのステップが、どうも教育の改革にあるんじゃないかという風に私は思えてなりません。

そういった意味で、教育の中で死んだ言葉つまり死語ではないような言葉を大学人が紡ぎ出せるようになった時に、今又新しい学問の言葉というものの意味が生まれてくる筈ですし、学問の言葉の再生がある。そういうようなところに繋がっているということを感じています。教育と研究との双方の関係を巡るコンタクトの

変化を踏まえた上で私達は教育についても研究についても考えていかなければいけないと思います。

高々三年半しかやってない人間が、これは研究者としても実はまだまだ新米なわけですし、どうも色々研究者としても大先輩である皆様を前に不遜なことを申し上げました。けれども、これも大学村に入り込んだフィールドワーカーの観察ぐらいに思っただけで聞いて下されれば幸いです。

どうも御静聴有り難う御座いました(拍手)。

牧：

それではさっそく今の講演に関しまして二三質問をお受けたいと思います。大学教育並びに研究についての改革、それ以前に問題点の指摘、そしていろいろな面での御提言が御座いました。それら全体を含めてどうぞ御自由にお願いを致します。

質問者：

甲南大学の倉沢です。非常勤講師で関西学院の法学部と商学部にまいております。総合教育研究室から授業評価のご案内をいただいておりますが、申し訳ないことですが私は面倒くさがりまして、調査の趣旨は良いことと思っております。今申しましたような訳で失礼しております。今のお話しの中で、一番最後にお話しになったことですが、東京大学の中でお互いの授業についてディスカッションする機会が教育学部で50年間なかったとおっしゃいましたが、それは東大だからかなと……。関西の人間はその辺はフランクでして、お互いに悪口を言い合うことは当たり前のことになっておりまして、あつかましい人間が多いのです。実は私も東大を出たわけですが、東京の人は割とプライドがありますからそういったことも関係しているのかなとも思いますが。先生は物理学とかではうまくいかないと思うとおっしゃいましたが、私の教えております数学はそうじゃないですが、物理学については先生のおっしゃるとおりでし

て、工夫しないとイケないと思います。私は国立大学を定年になってから私学に来たものですから、国立大学の場合と私立大学の場合、関西学院大学も含めまして、ちょっと感覚が違う。感じが違うので初めは戸惑いました。実は私は悪いもんですから、大学でも私語がすごく多いので私語をしてる者がいたら僕は殴って廻ってたんですけど(笑)関学でも殴りまして、それで関学で殴って怒られたらここは右の頬を打たれたならば左の頬を出せというような教えの学校だから別に殴っても良いだろうと言って糾明するつもりだったんですが、この頃は学生が非常に真面目に聞いてくれてるんですね。それは、分からせようという努力を私がしなきゃいかんということを実感して、今まではこっちが言えば皆が分かろうとしてくれていたと思っていたのが、それがそうじゃないということが分かってきたからなんです。

もう一つ、僕は大事な問題は入学試験だと思うんですね。日本の諸悪の根元は入学試験、センター試験を初めとする入学試験かも知れない。その入学試験には大学の入学試験、高校の入学試験もありますが、それがあるために受動的な勉強しかしない。要するに例えば数学が暗記物であるというような、そういう塾の教育を受けて来る。で、要するに沢山のことを覚えて短時間の間に自分の覚えた知識をわーっと分かっているやうがいまが何でも良いから書くと、そうすると合格する。そうではなくて、何か根底から物を考えるやうな人間てのは皆落ちこぼれて駄目になる。僕はこういうのはね、二十一世紀には日本が没落する原因の一つになると思うんですが、その辺の所をね、東大でもそうだと思うんですが、それでもね東大には優秀なのが揃っているんでしょうけれど。先程言われたどこかの女子大か何かにもしも非常勤で行かれるといっぺんに分かると思うんですが、そういう所で、これは日本人の悲しき性なのかですね。というのは、このあいだ名古屋でちょっとある会合があった時に聞いて面白かったんですけど、日本の大学生というのはインマチュア(imma-

ture)だったと、欧米の大学生に較べると三年から五年は子供だと、幼稚っぽいという言葉を使った人がいましたが非常に幼稚だと、まあそういうことがあると思うんですね確かに。その辺が受験勉強で余計に拍車をかけられて非常に受動型の人間ばかり製造している。この辺の問題について何か改善法、具体的な事でもございましたら……。関学では一つおやりになっていることは私知っておりまして、プリゼミというのは法学部はおやりになってるんですね。あれは非常に結構なことで私共も真似をしたいと思っておるんですが、理学部あたりでは非常にやりにくいんで困ってはおるんですけども、まそういう試みも御座いますがもっと一般的な事でも何かお考えが御座いましたら伺いたいんですけど。

苜谷：

矢張り関西の大学の方が大学改革が進んでいるというのは、そういう先生方のフランクなところが反映して進んでるんだなって思いました。これはどうも、東大だけの話じゃなくてなかなか東京の大学人が集まってもそういう話にならないですね。やっぱり格好付けてんでしょかね。ちょっとそういう感想を持ちました。今のご質問なんですけれども、まず入試と大学との関係なんですけれども、私はこういう風に考えてます。

つまり、入試というのはやりようによっては学生の基礎学力を高めてくれるまたとない制度である。ただ問題はそこで受動的な学力あるいは受け身の態度というものが作られたのをどう作り変えるのか。どうもですね、さっきのことばでいうと、伝授型の知識だとそのまま、受け身のまま与えてたんじゃないかと思うんですね。で、それを入試はどうせ受動型なんだと開き直ったところで大学の授業の方を参加型に変えていく。大学の四年間というのは殆ど縛りがないんですよ。高校まででそれをやれっというのは色々な理由があって難しいと思います。例えば学習指導要領一つとっても知識の縛りが

あるわけですし、それから授業科目数にしても、高校で大学のように自由に出来るかといえば非常に難しい。ゼミみたいなものを展開できるかといえば難しいわけですね。ですから、寧ろそこはこう、大学の、つまり6・3・3・4の4の役割が6・3・3までで作られてきた基礎的だが可成り程度の高い受動的な学力を能動的な物に変えていく時間だ、と考えれば大学の意義は随分違う物として出てくる筈なんです。

で、それ以前に勿論改善出来て自分で考える学生がたくさん高校の頃から出来てくれば良いんですけども、それが出来なければ大学は何もしないんだというんじゃないかって寧ろ折角そこまで基礎的な学力を付けて来てくれるわけですからそれをフルに利用して如何にそれを能動的な学力に変えていくのか、そういうところに大学の意味もあるんじゃないかと考えます。その時に、入試が諸悪の根元だと思わないわけです。ちょっとの悪だけど、根元だとは思わない必要は無い。そういういわば悪の中にも良い所があったらそれをどう活かすかっていう風に考えた方がいいと思います。学力の持っている能動性・受動性みたいなものを何処で転換するかという時に大学が持っている役割はこういう時代だからこそ大きいんだっていう認識を持った方が良いというのが僕の考え方です。

その上で、どういう工夫があるのかということなんですが、プレゼミというのはどういふことをなさっているのか、私は具体的には知りませんが、多分そういうことと似た物なんだと思いますが、例えば東京大学では前期課程といわれる教養学部で一昨年からカリキュラム改革をして、これは皆さんご承知の例の「知の技法」といふのがたくさん売れてますがあのテキストを使って基礎ゼミといふのを文系で始めました。それは要するに東大生でも読めない、書けない、話せない、これをどうにかしなければならぬ。やっぱり大学の先生が教えなきゃ仕様がないうところでああいうテキストが作られたんだという話を聞いてます。そういうような工夫という物がやっぱりいろんな大学で始まっている。

それは矢張り一種のプレゼミみたいな物だと思います。

それからもう一つ私の知ってる例を挙げますと、これは私の居たノースウェスタン大学というところの例ですが、そこではフレッシュマンセミナー、多分これプレゼミと似てるんだと思いますが、そこで最初の学問的なスキルの手ほどきをします。これはもう図書館の使い方からコンピュータへのアクセスの仕方、それからそれこそ如何に物を調べてどう発表するのかということをやります。しかもその場合の特徴は大学院生のT.A.がそれを受け持っていました。そこから辺が、つまりスキルだったら教えられる、しかもスキルだけを直接教えるんじゃないくて大学院生の持っている専門を教えながらそれを通じて教えるというようなことをやりました。これは大学院生にとっても可成りのトレーニングになります。教える、スキルを学ぶ。だからそういうような一種のプレゼミ的な試みはそういう意味では広く行われているんだと思いますし、東大の場合もそういうようなことをやっているということですね。

質問者：

僕も実は先生と同じように思ってたんですね。殆ど同じ意見だったんですが、甲南大学へ行ったら一つの実験をやってからちょっと考えが変わったんですけど。先生のお話は高校を卒業して大学入試に合格した者を改善する、それを合格しない奴は人間の内に入れないと、まあそういうことなんですね、一言で言うと。そうじゃなくてね、数学の物を考える能力が非常にある生徒が甲南の中学に居りまして、それはもう僕が見て本当にびっくりするようなレポートを漫画で書いてきたんですが、この間僕はそういう実例をチューリッヒで発表したんです。その男は数学の成績も他の成績もとても悪いんです。大学には入れないんですね。入れないんですが、本当にオリジナルに物を考えるというのは、とてもじゃないけど成績の良い者が全く及ばないような人間なんですね。僕はそういう人間がこ

れから必要になるんじゃないか、だから入試でふるうのがいいのかなという気がちょっとしているということなんです。

牧：

有り難う御座いました。まだまだご質問あるいは話題は尽きませんでしたけども、一応講演会はこれで終了させていただきまして、次の第2部に移りたいと思います。すぐに始めたいと思いますが、ここで最後に本日の御講演を頂きました荻谷先生に恐れ入りますがもう一度拍手を持ってお応え頂きたいと思います。有り難う御座いました(拍手)。